

県旗に思いを込めて

城南高等学校 大元 彩羽



2022年7月28日、新型コロナウイルスが日本に上陸して3年目の夏、私は、アスティとくしまで行われた「令和4年度全国高等学校総合体育大会～躍動の青い力四国総体2022～」の総合開会式で旗手を務めさせて頂きました。四国での開催は、香川県を主会場に開催した1998年以来24年ぶりで、各校の選手は、この大きな舞台への出場を目標に日々練習に励み、また、大会を支える推進委員の高校生の皆さんは、歴史に残る大会を作り上げようと準備に精一杯取り組まれたことと思います。しかし、今年も感染症の影響で中止にならないか心配していましたが、感染対策が講じられた条件での開催が決定され、多くの人々の努力が無駄にならず、本当に良かったです。

私は、出場チームの部員でもありましたが、総合開会式で徳島県選手団の代表として旗手を務めるという大役により、何日も前からプレッシャーを感じ不安でした。しかし、当日、開会式の運営スタッフの方々が優しく丁寧にアドバイスをしてくださったおかげで、心がふっと楽になりました。スタッフの皆さんありがとうございました。

そしていよいよ本番。すばらしい会場の雰囲気を感じたのはもちろん、更にその気持ちを倍増させてくれたのは、同じ城南高校の吹奏楽部による演奏が聴こえてきたからです。同時に、学校の仲間が側にいてくれる嬉しさも味わうことが出来ました。そのような学校の仲間のことを考えると、開会式を笑顔で楽しみながら行進することで、携わってくれた全ての方の気持ちに応えることになると気づき、県旗を握る手に心を込めて入場しました。

その後、秋篠宮様や、飯泉嘉門知事などから今大会の開催を祝う挨拶があり、徳島県推進委員会の委員長としては、海部高校3年生の松島海七さんが歓迎の挨拶を述べられました。松島さんからは、「四国総体が闘志で燃え上がり、躍動する素晴らしい青春の舞台になることを期待しています。」という言葉が聞きました。この言葉から、これから数日の間、慣れ親しんだ徳島県や四国の各地で真夏の大激闘が行われると思うと、ぞめきが街中に響く阿波踊りの日の様に、胸が弾みました。きっと同じような気持ちを感じた選手は沢山いたのではないのでしょうか。

地元の高校生らによる、「お遍路さん」をテーマにしたプロジェクトマッピングを使ったダンス、徳島伝統の和太鼓や阿波踊りが始まりました。会場は、華やかな空気に包まれていて、パフォーマンスを披露している皆が輝いていて、鳥肌が立ちました。この感情を味わえたのは、選手のために総合開会式を盛り上げようとしてくれた皆さんの情熱を全身で感じる事が出来たからだだと、今振り返るとひしひしと感じています。本当に楽しい時間でした。

今回総合開会式にしたことで、一つの催しには、こんなに多くの方が成功に向けて、企画、準備、運営に携わっていることを学び、感謝の気持ちを再確認することが出来ました。これから私が選手として出場するときは、審判員や運営の先生方にはもちろん、応援してくれている全ての方々の期待に応えられるような選手を目指したいと思います。

今回は、全国の方々にインターハイによって四国の魅力とスポーツの感動を感じてもらいました。これを機に、四国に徳島に新たな魅力を再発見しに、今回出場したチーム関係者の皆さんや、その他多くの人々が訪れてくれたら嬉しいなと思います。

皆さんからの躍動の青い力と貴重な体験、本当にありがとうございました。

青春をかけた3年間

～インターハイ総合開会式で選手宣誓をして～

富岡東高等学校 北山 菜々実
バレーボール部主将

「躍動の青い力 四国総体 2022」この夢舞台に立つことを目標に3年間努力を続けてきました。地元開催という期待とプレッシャーの中、絶対に夢を叶えたいと思えば思うほど気持ちは押し潰されそうになりました。「今、自分

に出来ることは何か」コロナ禍の3年間は常に自問自答を繰り返す日々でした。仲間と共に練習することが難しくなったことや試合が中止となり目標を失いかけたことから、これまで当たり前だと思っていたことがそうではないと気付きました。限られた時間を大切に使うことや当たり前の日常に感謝し生活すること、こんな時代だからこそ気付けたこと、学べたこともあります。先の見えない不安もたくさんありました。しかし、私のまわりには共に悩み、共に目標に向かう仲間、厳しくも温かく見守って下さる指導者の方々、どんな時も味方で支えてくれる家族、「頑張れ」と声をかけ応援してくれる多くの方々のおかげで夢の舞台に立つことができました。

インターハイ総合開会式の選手宣誓のお話を聞いたとき、全国の高校生の代表として宣誓をすることに大きな責任を感じました。しかし、「日本中の人々に勇気と感動を届けたい」と強く思い、これまで応援し支えて下さった方々に感謝の気持ちを届け、私たちの若い力で日本を元気にしたい、何より、このインターハイの舞台で戦うことができることに感謝を忘れず、最後の夏を完全燃焼し最高の夏にしたいという思いを込め宣誓文を考えました。宣誓後、多くの方から「感動した」や「勇気をもらった」と言ってもらい、これまで支えて下さった人への恩返しが出来たような気がしました。

私はバレーボールを通して、たくさんの人の協力があるからこそ自分の力を発揮することができることを知りました。これから先もたくさんの壁があると思います。しかし、一人で考えず周囲の人と協力し、助け合うことで何倍もの力が生まれることを学んだので、自分自身が築いてきた「結」を大切に新たな目標に挑戦していきたいです。コロナ禍の高校生活は出来ないこともたくさんありましたが、青春をかけた3年間は私にとって最高の3年間でした。

最優秀賞を受賞して

富岡東高等学校 松下 由愛



第49回県高校総合体育大会写真コンクールで最優秀賞を頂きました。この出来事のおかげで、今まで経験したことが無かったこと、もしかするとこれからの人生で経験することができなかったかもしれないことを経験することができました。

その一つは、自分についての新聞記事を掲載していただいたことです。夏休み期間中の補習後に徳島新聞社さんの記者さんが私の高校に来てくださり、約1時間にわたって取材を受けました。元々私は口下手な方だと自分でも思っていたので、始まる前はこの件をお断りしようかと思っていたのですが、家族や顧問の先生にせっかくの機会だから取材を受けてみてはと助言を頂き、受けることに決めました。当日は始まる前から緊張でずっと体がソワソワしていたことを鮮明に覚えています。拙い言葉ではあったとは思いますが、記者の方がうまく記事にまとめてくださいました。

二つ目は周りの人からたくさんの祝福の言葉をもらったことです。受賞をいち早く知り連絡をくれた友達を筆頭に家族や親族、普段あまり話す機会のない同級生までもが「おめでとう。」と言ってくれました。日常生活において褒められることはほぼゼロに等しいので、どこか気恥ずかしさもありましたが、やはり人に褒められるということはとても嬉しいことだと再確認しました。だから、私も人のことを積極的に褒めていきたいなと思うことができました。

今回このような賞を頂いて、改めて思うのは、様々な人のおかげでこの賞がもらえたということです。写真撮影に行くことを許可して下さった関係者の方々、試合会場までの送迎してくれた祖母、できるだけ前の方で撮影できるようにと席を譲ってくれた様々な方々などです。特に一番感謝したいのが写真の被写体となってくれた阿波高校の方です。写真は撮影者の技術だけでなく被写体の表情も大きな部分を担うので、あの日あの時あの瞬間に凛々しく目的を狙う素晴らしい表情をして下さっていたことには感謝しかありません。

これからは写真を撮る楽しさを忘れることなく、技術的にもセンス的にも成長していきたいと思えます。

最高の徳島インターハイを終えて

富岡東高等学校 吉田 康晟



2021年12月、2022年に徳島で行われる全国高校総体に向けての最も重要な冬季練習が始まりました。2021年度の全国大会での成績を見てみると、それまでの自己記録を大きく更新する15m10を残したものの、勝負所での弱さが目立っており、課題は明確でした。

まずはケガの防止と体の使い方を学ぶために、ウエイトトレーニングを徹底的に行いました。そのおかげでケガなく冬季の走り込みを積むことができました。また、身体作りと並行して、跳躍の技術改革も行いました。シングルアームからダブルアームへと変更し、冬季中も週1回技術練習を組み込み、完成度を高めていきました。ウエイトトレーニング、走り込み、そして技術練習の三つを繰り返していく中で、課題であった腰痛、助走スピード、そして力任せな跳躍を克服していきました。その成果は、春先の大会から現れて理想的な状態でインターハイに臨むことができました。

そして迎えたインターハイ当日。いつもと同じ朝ご飯を食べ、会場に向かい、当日付き添ってくれる先輩と合流しました。アップ開始まで緊張を和らげてくれて、リラックスして予選へ入ることができ、危なげなく決勝に進出を決めました。

決勝。3本目には自己ベストであり、県高校新記録となる記録を跳び、5本目に大ジャンプを決めて1位になることができました。跳躍の感覚や、勝利が決まった瞬間の光景、感情は今でも覚えています。高校3年間の集大成を表現でき、今まで支えてくれた方々への感謝の気持ちも同時に伝えることができました。本当に人生で一番の瞬間だったと思います。

このインターハイを振り返ってみると、学んだことが二つあります。それは計画を立てることと努力量の大切さです。本当に綿密に計画を立てて練習に取り組むことができ、限界を少しずつ超えていくことをテーマに自分でも驚くほどの練習量で冬季練習を積むことができました。また、ケガをせず一つ一つの練習をたくさん考え何度も試行錯誤していく。それを1年間やり遂げられたことが一番の自慢です。

今は2022年12月。来季の目標に向けて冬季練習の計画が仕上がってきています。2023年にさらなる結果を残すことができるように、冷静かつがむしゃらに目標に向かって走り続けていきます。

インターハイ 2 位に入賞して

生光学園高等学校 川 口 由 眞



8月に開催された徳島インターハイで、女子砲丸投に出場しました。不甲斐ない内容で終わってしまった昨年の福井インターハイのリベンジをするために、冬季から今まで以上に練習をし、先生方と連携をとってきました。それにもかかわらず、シーズンに入ってから悪癖である右の角度外を投げてしまったりあと1本が投げきれなかったりと、精彩を欠いた試合が多かったと思います。大会数週間前からはシミュレーション練習が始まりました。予選通過記録は投げられるものの、決勝では思いどおりの投げができず大きな不安がありました。監督の林先生から角度を振って投げることやグライドを深く入る等のアドバイスをもらい、本番を迎えることになりました。

試合当日、予選はノーアップで挑みましたが1投目は失敗。2投目で通過することができました。決勝では2投立て続けに失投してしまい絶体絶命の危機的な状況でしたが、後輩の山口が自己ベストを投げてよい流れをつくってくれたおかげで、私も3投目にはなんとか入賞を決める投げができました。ここから勝負だと感じていましたが、4、5投目は汗で砲丸が滑ってしまい、またもや失投となってしまいました。今季のこれまでの試合で投げきれていなかったこともあり、自分自身「もう無理かな」と思いました。そんな中、山口が5投目に大ベストを投げて最高の場面で私に繋いでくれました。最終投擲直前に運よく汗が止まり、林先生からアドバイスをいただいたとおりに、グライドを深く入って思いきり投げることができ、14 m 04 で準優勝することができました。高校1年生の時に全国高校陸上で14 m 37 を投げて優勝してからは怪我や甘えで思うような投げができず、周囲にもたくさん迷惑を掛けたと思います。徳島インターハイで優勝するという目標は達成できませんでしたが、苦しかった2年間の思えば、久しぶりの14 m台は本当に嬉しかったです。今回のような結果を出せたのは、諦めずに指導して下さった先生方、献身的にサポートして下さった大学生の先輩方、自己ベストを連発して近くで支えてくれた山口、そして家族のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

インターハイで活躍する兄に憧れ、自分も同じ環境で陸上競技したいと思い、中学校から生光学園に入りました。辛いと感じることもたくさんありましたが、それでも今まで頑張ってきたのは、インターハイという一つの目標があったからです。地元、徳島での夢の舞台で「一投に賭ける」投げができたことに誇りを持ち、次の目標に向かってこれからも努力を続けていきたいと思っています。

インターハイに入賞して

生光学園高等学校 山 口 嘉 夢



私は地元開催となった徳島インターハイの女子砲丸投で5位に入賞することができました。

元々大阪に住んでいた私は、どうしても強くなりたくて、勝ちたくて徳島の生光学園に進学を決めました。年末年始に徳島の合宿に参加した時、今シーズンの目標を「インターハイ出場。予選通過。」と決意を固め、朝日に向かい叫びました。この目標を達成する為に、コツコツ毎日練習に励み、顧問の林英司先生や豊永陽子先生のご指導のおかげで私はどんどん上達しているのを感じました。

試合1週間前から安定した投げ、上がるモチベーション、周りの方々からいただいた応援で絶好調になり、インターハイ本番を迎えることができました。本番前もずっと先生方や先輩方家族が支えてくださり、少しでも恩返しができるよう精一杯試合に臨みました。

予選通過は12 m 70。予選の1投目にファウルをしてしまい、焦りました。そんな時、同じ会場で試合をしていた川口由眞先輩が「一緒に予選通過しよう」と声をかけてくださり、落ち着いて投げることができ、2投目に自己ベストの12 m 88 を投げ、なんとか決勝に進むことができました。

決勝では予選とは違ったピリピリした感じと勝負の緊張感が漂いました。その中でも私は絶好調で2投目に13 m 12 を投げベスト8に入り、5投目に更に記録を伸ばすことができ13 m 24 の大ベストで5位に入賞することができました。このような試合ができたのも、予選の1投目に失投し焦っている私に川口先輩が声をかけてくださり、落ち着かせて下さったから結果につながったのだと思います。試合が終わった後、すぐに先生方が私と川口先輩のところに駆け寄ってくださり、「二人ともよく頑張った」と言ってくださいました。

私がインターハイで入賞することができたのも、日ごろから支えて下さっている先生方や先輩方、家族や関係者の方々のおかげだと心から感謝しています。本当にありがとうございました。

この貴重な経験を次に繋げていくために今の結果に満足せずしっかり練習に励みたいと思います。

インターハイで8位入賞して

鳴門高等学校 佐藤 安里紗



今年のインターハイで8位入賞を果たすことができたのは、多くの人の支えがあったからだと思っています。高校1年生の時は、インターハイが中止になってしまい、2年生の時は予選落ちしてしまいました。そのため、最後のインターハイでは入賞したいという気持ちで日々練習に励んできました。今年のインターハイの陸上競技は、地元徳島県での開催ということもあり、慣れた競技場で試合に挑めるという私にとって最高の舞台となりました。先生の的確なアドバイスにより、コンディション調整も順調に行うことができ、万全の状態ですべての試合に臨むことができました。

試合当日、いざピットに立つといつも試合をしている競技場の雰囲気とは全く違いました。最後のインターハイで絶対に失敗できないというプレッシャーを感じて思うように動けず、予選通過記録は越えられませんでした。上位14名に入ることができたので決勝に進出することができました。決勝では予選の時よりもリラックスでき、失敗しても跳躍の微調整を行うことでラウンドを進むことができました。そして、バーの高さは170cmに上がりました。今までの大会で一度もクリアできなかった170cmの高さをクリアするということは私の中で大きな課題でした。1、2本目は失敗してしまいましたが、2本目の跳躍で成功への感覚を掴むことができ、3本目の跳躍では自分の思い描いた跳躍で成功することができました。目標にしていたインターハイ入賞と自己記録の更新を達成し、満足のいく結果で終わることができました。

今回のインターハイでは、全国トップクラスの選手の動きをたくさん見ることができました。レベルの高さを肌で感じ、これまで自分の甘かった部分や強化できる部分を知ることができ、これからも競技を続ける私にとって貴重な経験となりました。また、私のサポートや応援をして支えてくれたすべての方々へ感謝しています。結果に喜んでくれる人達がいることで私の励みになり、強い力となっていました。そして、悔いのない結果を得られたのは指導して下さった先生や日々の練習を共にしてきたチームメイト、サポートしてくれた母の存在があったからだと思っています。これからは周りの人に感謝し、また私も他の人をサポートできる人間となれるよう自分を成長させていきたいと思っています。

今回のインターハイでは、全国トップクラスの選手の動きをたくさん見ることができました。レベルの高さを肌で感じ、これまで自分の甘かった部分や強化できる部分を知ることができ、これからも競技を続ける私にとって貴重な経験となりました。また、私のサポートや応援をして支えてくれたすべての方々へ感謝しています。結果に喜んでくれる人達がいることで私の励みになり、強い力となっていました。そして、悔いのない結果を得られたのは指導して下さった先生や日々の練習を共にしてきたチームメイト、サポートしてくれた母の存在があったからだと思っています。これからは周りの人に感謝し、また私も他の人をサポートできる人間となれるよう自分を成長させていきたいと思っています。

インターハイで学んだこと

徳島科学技術高等学校 ウエイトリフティング部 内海 孝介



私は8月5日に愛媛県新居浜市で行われた、全国高校総合体育大会ウエイトリフティング競技55キロ級に出場しました。高校3年であり、これが最後のインターハイになるのでとても緊張していました。

私は55kg級なのですが、普段の体重は57kg程度あり、前日までの減量で順調に理想の体重まで落として現地入りしました。そして、前日の夕飯と当日の朝食を抜き、検量に臨むと更に体重が落ちていて、規定重量-800gで検量をパスしました。

いよいよ競技開始です。まず、スナッチ競技が始まりました。どちらかというとクリーン&ジャークより得意なのですが、このところ調子が悪かったため、スタート重量は低めの78kgを申し込みました。これは軽く挙げることができ、2回目の80kgも成功することができました。3回目は82kgに挑みました。しかし、セカンドプルで一気に頭上に引き挙げるところで引きが甘くなって落ちてしまい、失敗してしまいました。「やってしまった。」と思いましたが、もうどうにもなりません。

残念な気持ちを切り替えて、クリーン&ジャークの競技に臨みました。1回目は軽めの98kgからスタートしました。少しバランスを崩してしまいましたが、成功することができました。次は100kgを申し込みました。少し重く感じましたが、これも成功することができました。そして最後の試技となる3回目は102kgを挙げる事ができ、苦手なクリーン&ジャークで3回の試技をすべて成功させることができました。

競技中は無我夢中で順位のことには考えていませんでしたが、結果はスナッチ8位入賞、クリーン&ジャーク4位入賞となり、トータルでは5位に入賞することができました。やはり、スナッチが自分の思い通りにできなかったことが一番の反省点だと思っています。一方、クリーン&ジャークは自己新記録には至らなかったものの、すべて成功できたので少し安心しました。

私が入賞できたのは、日頃から熱心にご指導してくださる先生方やトレーナーの先生、部活の仲間、家族の支えがあったからだと思っています。また、コロナ禍の中、多くの皆様のご協力によってこの大会が開催されたことに、感謝を忘れてはいけなかったと思います。

私はウエイトリフティングを通じてたくさんの事を学びました。尊敬できる先生方や仲間と出会った事も大きな財産だと思っています。これからは、この経験を今後の人生に生かすとともに、ウエイトリフティングを陰から支えることができる存在になりたいと思っています。

インターハイに出場して

鳴門渦潮高等学校 萬里 勇昇



私は、2022年8月5日から8日にかけて、愛媛県新居浜市新居浜市民体育館で行われた令和4年度全国高等学校総合体育大会ウエイトリフティング競技大会に、男子55kg級で出場しました。

自分自身、初めての全国大会で少し不安と緊張もありましたが、スナッチは80kg、クリーン&ジャークは98kgを挙げることができました。自己最高記録ではありませんでしたが、スナッチは全国8位、クリーン&ジャークは7位、トータル178kgで6位に入賞することができました。

高校入学当初は、こんなにもウエイトリフティングが好きになるとは思っていませんでした。腰や足首を痛めたりして、思うように練習ができない時期もありましたが、顧問の川島先生や外部コーチの瀬部先生が親身になって指導してくださったり、同期で主将だった中原君をはじめ多くの仲間たちの支えがあって、今まで挙がらなかった重量を挙げるできるようになり、どんどんウエイトリフティングに魅了されていきました。ウエイトリフティングは個人競技ですが、みんなの応援が結集されて、最大限の力を発揮することができます。そのおかげで、初めての大会で全国入賞することができたと、ほんとうに感謝の気持ちで一杯です。仲間たちとともに過ごしたかけがえのない貴重な日々を忘れず、渦潮高校ウエイトリフティング場で学んだことを生かして、これからの人生を歩んでいきたいと思います。

インターハイ5位に入賞して

鳴門渦潮高等学校 月岡 志道



自分とは、インターハイ5位の結果だけ見ると、グレーゾーンといったところですが。なぜかという、まず自分はインターハイの3週間前ぐらいに腰を痛めてしまって練習できなかつたからです。

実際に練習したのはインターハイの2週間ぐらい前からです。まだ、腰を痛めていたので、激しい練習ができず、スナッチとクリーン&ジャークの二つの種目のうちの、スナッチを中心に練習しました。その理由は、最初に行われるスナッチを3本とも失敗すると記録が0になり、その後に行われるクリーン&ジャークでどれだけ重い重量を挙げて、記録として残らないからです。しかし、腰が痛かったので自分が思うようにうまくはいきませんでした。自分のスナッチのベスト記録が110kgであるのに対して、インターハイ前は100kgが限界でした。最初は何かかなと思ったのですが、ベスト記録が135kgのクリーン&ジャークもその時は120kgも挙げることはできませんでした。親戚やまわりの人たちからは「インターハイに出場するだけでもすごいから、いい記録を出さなくてもいいよ。」と言われたのですが、自分が出場するからにはいい成績を出して兄弟で全国1位となり、中学校のときのようにTVで取り上げてもらいたかったので、腰に負担がかからないように、自分が今できる最善の練習をして試合に臨みました。

スナッチは1本目が107kgで成功し、2本目は110kgで失敗し、3本目の成功で記録は110kgでした。クリーン&ジャークでは、1本目が130kg失敗で、2本目同重量で成功し、3本目136kgが失敗で、2種目合計のトータル240kgで5位でした。まわりの方々には、「腰が痛い状態での5位はすごい」とほめていただきましたが、自分としては、1年からインターハイ1位をとって初めての全国1位達成が目標だったので、納得のいく結果ではありませんでした。今年度の秋季国体は出場辞退したので、3月に開催される全国選抜大会で優勝し、自分の掲げた目標を達成したいです。その実現のために、自分自身を完膚なきまで追い込み、今の2倍ぐらいの練習をして圧倒的な成績での1位を目指したいです。

3年間の思いをぶつけて

阿波高等学校 長瀬 拳悟



「燃え上がれ我らの闘志四国の大地へ」この言葉を駅に貼られていたポスターで見たとき、遂に目標であった日本一を果たす試合が始まるんだと胸が高鳴りました。

1年生の時はコロナウイルスの影響で中止となり、2年生では3回戦で敗退しました。春の全国選手権大会は、直前にコロナの影響を受け、大会出場はできたものの十分な練習が出来ずベスト8という成績でした。この悔しさは、絶対に夏のインターハイで返すという気持ちで、日本一だけを目標に練習しました。

迎えた当日、初戦は京都代表でした。1試合目ということもあり、体が力んで自分の柔道を出すことが出来ませんでした。相手の反則負けでなんとか勝つことが出来ましたが、内容が悪く、2回戦に向けて集中し直す必要がありました。気持ちを切り替えて臨んだ2回戦は、宮崎の選手でした。自分から攻めることを意識して、最初から勢いよく技をかけることが出来、一本勝ちで勝つことが出来ました。3回戦では、春の全国選手権大会で同じくベスト8で、強豪校埼玉栄高校の選手でした。実力は拮抗していて延長戦に入りましたが、得意の粘り強さを武器に僅差で勝つことが出来ました。続く準々決勝は試合間隔が短く、3回戦の疲労が取れない状態での試合でした。体は疲労していましたが、「ずっと目指してきた高校日本一を取る最後のチャンスなんだ。」と自分に言い聞かせて、気持ちを奮い立たせましたが、僅差で敗北しました。

中学の時に全国大会で負けてからの3年間ずっと日本一だけを目標に練習をしてきたので、とても悔しい気持ちでいっぱいでした。この悔しい気持ちは大学で絶対に返したいと思います。

自分がここまで柔道を続けてこれたのは、食事面や精神面で支えてくれた家族と、先生方やこれまで練習をつけてくださった先輩方のおかげです。ここまで支えてくれた人たちのために、大学では大きく成長し、世界で活躍できる選手になれるよう努力していきます。

インターハイ 第7位になって

徳島科学技術高等学校 高木 理夢



今年のインターハイは8月15日から18日にかけて、高知県のくろしおアリーナで開催されました。四国での開催ということもあり、大会前から新聞やテレビなど様々なメディアの取材を

受け、地元開催の期待の大きさを感じました。そして周囲の期待に答えられるように頑張ろうという気持ちが、日ごとに大きくなっていきました。

インターハイの予選となる四国大会では男子100・200m背泳ぎで標準記録を突破して優勝し、2種目の出場権を得ることができました。好調を維持したまま、インターハイに臨みましたが、得意の100m背泳ぎを予選5位で決勝に進んだものの、決勝ではまさかのフライングで失格となってしまいました。スタートした瞬間「しまった!!」と思いましたが、もしかしたらという気持ちで最後まで全力で泳ぎました。しかし、結果は思ったとおりの失格で、レース直後は落ち込みましたが、翌日の200m背泳ぎに向けて気持ちを切り替え、レースの動画を見直し、自分の泳ぎを再確認しました。翌日の200m背泳ぎの予選では、プレッシャーを力に変え、予選7位で決勝に進みました。決勝ではさらに上を目指して、前半から攻めの泳ぎで、50mと100mを3位で折り返しましたが、その後力尽きてしまい、7位でのゴールとなりました。

思いがけないこともありましたが、全力を出し切ることができスッキリした気持ちで大会を終えることができました。

これまで支えてくださったコーチや家族を始め周囲の皆様にご感謝申し上げます。また、大学へ進学してもさらに高いレベルを目指して頑張っていきますので、これからも応援よろしく申し上げます。



リベンジに向けて

生光学園高等学校 牛方美羽



令和4年度四国インターハイを終えて、私たちは全国大会団体5位という結果を残すことができました。2回目のインターハイ出場では私は団体戦の大将を務めました。校内予選を行い団体メンバーに入ることができ生光学園の

代表として、メンバー入りできなかった仲間の気持ちも背負って戦う気持ちで全国大会の畳に上がりました。

初日、1回戦目は栃木県の國學院栃木高校と対戦しました。自分より小さい相手でしっかり3対0で勝ち切ることができました。初めて全国大会の団体で勝つことができ嬉しかったです。2回戦目は和歌山県の箕島高校との対戦でした。得意技の大外刈りで勝ち、3対0で勝つことができました。初日はチーム全員が勝ち星で終わることができたので嬉しかったです。

2日目、3回戦からのスタートで、山形県の羽黒高校との対戦でした。1対1で大將の番がきました。絶対に勝たないといけないというプレッシャーの中、試合が始まりました。緊張のあまり、身体が思うように動かなかったのですが、大將という役割・チームの仲間のためにも全力で勝負に挑みました。得意技で勝利することができ2対1で準々決勝にコマを進めることができました。

準々決勝では、東京都の淑徳高校との対戦となりました。3月の選手権で戦った相手チームで3月の選手権では1対0で惜敗した相手だったので、今回はリベンジを果たしたいという意気込みで畳に上がりました。試合が始まり、先鋒・中堅が負けてしまいチームの負けは決まってしまいましたが、自分だけでも勝つぞ、と強い気持ちで挑みましたが負けてしまい3対0という結果に終わりました。大將の役割を果たしきれず自分自身にまだまだ弱さもあり後悔が残る試合となりました。

インターハイを終えて5位という結果を残すことができましたが、ここで満足することなく、もっと上位を目指していきたいです。

私たち2年生にとっては、これから迎える試合すべてに高校ラストという言葉が付いてきます。日々練習している成果を発揮できるように頑張っていきたいと思っています。そして、応援してくれている家族や日々お世話になっている先生方にも結果を残し恩返しができるようにしたいです。

全国高等学校総合体育大会に出場して

鳴門渦潮高等学校 後藤希颯
女子サッカー部



7月26日から30日の間に、地元徳島県で開催された全国高等学校総合体育大会サッカー競技に出場しました。今年は全国ベスト8という成績を残し大会を終えました。昨年の北信越総体では、初戦敗退という悔しい結果でし

た。全国大会の壁の高さを痛感し、全国の舞台で1勝したいという思いをチーム全体で共有しながら仲間と頑張ってきたことが報われて本当に良かったと思います。

1回戦は、全国大会で何度も優勝経験を持つ「藤枝順心高校（東海）」と対戦しました。試合カードが決まったときは、全国トップレベルのチームと対戦することが出来る期待感と、自分たちのサッカーがどれだけ通用するのかの不安感がありました。私は、ゲームキャプテンとしてチームを牽引する立場でしたし、全国の舞台というプレッシャーから、試合序盤は動きがたく、あまりいいプレーが出来ませんでした。試合は終始相手のペースで進み、防戦一方の形となり、相手の猛攻をなんとかしのぐという内容になりました。途中何度も足が止まりそうになりましたが、一生懸命スタンドで応援してくれている姿や、遠い大分から足を運んでくれている両親の姿を見ると最後まで頑張って走りきろうという勇気が湧いてきました。0-0のまま試合が終わり、PK戦で勝敗を決めることになりましたが、キーパーの活躍もあり、試合に勝利することが出来ました。チャレンジャーとして臨んだ試合でしたが全国の舞台で勝利することが出来てとても嬉しかったです。多くの人が「勝てるわけがない」と言われているカードでしたが、日頃トレーニングしている「守備力」や「集中力」、「忍耐力」が70分のなかで発揮され、36人全員で勝ち取った勝利となりました。

2回戦は、同じく全国トップレベルの「日ノ本学園（関西）」と対戦しました。あと一步のところまで全国ベスト4には届きませんでしたが、強豪校相手に先取点を取ったこと・諦めずに同点に追いついたこと等、自分たちの強みを出して試合を終えることができました。

今大会は、地元開催でたくさんの方々が応援してくださっている会場で、試合ができたことは一生の思い出です。たくさんの方の支えのおかげで、私たちは大好きなサッカーが出来ています。冬には選手権大会がありますのでこの悔しさをぶつけられるように日々の学校生活や練習に取り組んでいきたいと考えています。

8位のバトン

池田高等学校 郷田 聖奈



「目指すは6位内入賞。胸を張って伝えることができる結果を持って帰ろう！」と臨んだ全国総体。山の下見に何度も行って山全体を網羅し、それぞれが担当している知識審査に向けても努力を積み重ね、四国での開催も相まって気合いが入っていました。

迎えた大会当日。

いつもと同じ見慣れた四国の景色のはずなのに、会場に入ると、緊張感が高まっていました。私が1番緊張したのは、知識審査です。

私は、天気図を担当していましたが、ラジオの放送が始まる前、ペンを持つ手が少し震えていました。知識審査が終わった後、みんなの表情を見て、安心もあり、「まだまだここからだ。」と気持ちも引き締まりました。

そして、登山行動では山のアップダウンが激しく、下りの急勾配で足を滑らせることもありましたが、そこで気持ちを落とさず、下見で掴んだ自分たちのペースを崩さず、登りきることができました。何度も山の下見に行ったおかげで、山を登りながら行う読図審査も自信を持って取り組みました。

ピリッとした緊張感ある大会の空気が和む、高校生同士の交流会の時間や、昨年優勝した千葉東高校と偶然同じユニフォームを着ていて、一緒に写真を撮るなんてこともありました。この大会で、ライバルでもある全国から出場した高校生と出会えたことも良い思い出です。いつかどこかの山で会えたらいいなと思います。

そんなライバルとの4日間の戦いも終わり、試合結果発表の日。6位と0.2点差の8位という結果を知り、「表彰台まであと一步だったのに。」ととても悔しかったです。その時に、チーム全員で涙を流し、肩を組んだ時間が私は1番印象に残っています。

この8位という結果は、何度も山の下見に連れていってくれて1番近くで支えて下さった顧問の先生、「頑張ってた！」といつも温かい声をかけて下さった周りの方々、それぞれの強みを持った部活の仲間がいたからこそ掴むことができました。次に繋がる8位にもなったと思います。この大会での悔しさを来年の全国総体へと繋げてもらい、さらなる高みを目指して頑張りたいです。

私は、来年の大会開催地である北海道で待ってようと思います。

全国高校選手権大会で優勝して

阿南光高等学校 長坂 夢



私は広島県で開催された全国高校ライフル射撃競技選手権大会に出場しました。高校生の競技としては最も規模が大きく、この大会で優勝することを目標に部活動に取り組んできました。昨年の大会も個人で出場しましたが、終盤で得点を落としてしまい11位に終わってしまいました。それまで、順調に成績が伸びていき、自信を持って臨めたものの、悔しい思いをしました。しかし、この結果がそれからの1年間の練習のモチベーションになり頑張ってきました。

射撃競技はメンタルなスポーツなので、過度の緊張や油断で成績が大きく変わってきます。練習で普通にできていたことを試合で行うのがとても難しいです。プレッシャーや緊張する場面に強くなれる選手を目指し、練習してきました。2年生の後半になる頃には競技への自信も深まり、自分でも最も充実していました。しかし、3年生になる頃には、後輩の成長に焦りを感じ、「上手になりたい、勝ちたい」という気持ちよりも、「負けたくない」という守りの気持ちになってしまい、得点も伸び悩んできました。県予選が終わり、第一目標であった個人と団体での出場権を獲得し、もう一度始めた頃の「楽しい」という気持ちを忘れずに練習するようにしました。前哨戦となる宮城県で開催された全日本選手権大会や西日本大会では優勝することができ、自信を持って大会に臨みました。

大会本番では、緊張から満足いく得点ではありませんでしたが、無事予選を通過することができました。団体戦も兼ねているので、できればもう少し得点を伸ばし、後の選手につなげたかったです。乾選手と今田選手も高得点を撃つことができ団体戦を優勝することができました。個人戦ファイナルの前に優勝が決まりうれしい気持ちと、次は自分の事だけ考えてファイナルに臨むべく気持ちを切り替えて頑張りました。私は先行逃げ切りで優勝してきたことが多く、今回も最初の5発では高得点を撃つことができ順調な滑り出しでした。しかし、途中で得点が伸び悩み首位を明け渡すこともありましたが、1発1発に集中して競技した結果、最後は優勝でき、個人と団体での2冠に輝くことができました。

最後に、これまで応援や支えてくれた両親、先生、射撃関係者、ライバルの存在が私を成長させてくれました。感謝いたします。

全国高校選手権大会で8位に入賞して

阿南光高等学校 乾 紗 綺



私がライフル射撃を始めたのは、高校に入ってからでした。どの部活に入ろうか迷っていたところ、たまたま友達とライフル部の見学に行き、入部することになりました。初めての競技で何をすればいいかわからず、戸惑うことも多かったのですが、先生や先輩に教えてもらいながら練習することで、少しずつライフル射撃競技が楽しくなっていました。1年生の頃は試合に出ると緊張して練習で、できていた事ができず悔しい思いばかりしてきました。でも、上手になりたい一心で諦めずに練習に取り組んできました。2年生になる頃には、試合で練習と同じようにできるようになり得点も伸びてきて自信もつきました。目標も明確にでき、試合に出ることが楽しくなってきました。2年生の県総体ではファイナルに進んだもののあと少しのところまで全国大会出場を逃してしまいました。この時の悔しい思いが残りの1年間のモチベーションとなりました。

苦しい時期もたくさんありました。ライフル射撃競技は自分との戦いです。集中力を高め、精神統一、心を一点に集中。日々の練習、試合で心でこのことを思い、競技に挑んできました。2年生の3月に行われた全国選抜大会では3位になることができ、全国選手権大会で優勝することが明確な目標になってきました。県総体が終わった後、西日本大会、全日本選手権大会と県外遠征を重ね、経験を積んできました。いずれの大会でも上位に入賞することができ、自信を持って大会に臨みました。

大会規模や参加人数はこれまでの大会よりも多く、会場内でも独特の雰囲気にも包まれていました。1射群が終わって満足そうにしている選手や悔しそうにしている選手など様々ですが、自分の事だけに集中して周りを見ないように心がけました。最初は緊張から得点が思ったように伸びずに苦しい立ち上がりでしたが、一発一発に集中して徐々に調子を取り戻していきました。結果は目標としていた点数には少し足りませんでしたが、ファイナルに進めることができました。この点数は団体戦の点数にも反映されるので、できるだけ高得点と思っていましたが、他の選手に上手くつなげられたと思います。団体では目標としていた優勝をすることができました。ファイナルに出場するも緊張や自分が思うようなプレーができずに8位という結果に終わってしまいました。けどいつも思っていた「集中力を高め、精神統一、心を一点に集中」ができ、楽しく射撃ができたので悔いは無いです。応援してくれて支えてくれた多くの方に感謝の気持ちを忘れず、高校を卒業しても新たな目標を見つけて進んでいきたいです。

全国高等学校ライフル射撃選手権大会に入賞して

小松島高等学校 ライフル射撃部 戸 田 陽 翔



昨年の夏、全国選手権で最後思うような成績が残せず、あと一步で悔し涙を流した先輩達から「来年はおまえが全部勝て！」と言われました。その時初めて、人から強く期待されていると実感し、今まで以上にライフル競技に真剣に取り組もうと思ったことをはっきりと覚えていました。このことは苦しいときの私の支えになりました。

選手権大会の1週間前、宮城県で開催した全日本ライフル射撃選手権大会でチームライフル競技に出場し第2位となり、しっかり調整できた状態で2度目の全国選手権大会に広島に向かいました。今回もチームライフル競技に個人・団体出場し、団体戦では第3射を担当しました。真夏の猛暑の中、気温が急激に上がる昼過ぎの試合でした。試合前に監督から「団体のことは意識せずに自分の射撃に集中しろ」という話があり、リラックスして試合場に入りました。しかし、高温多湿の環境ではいつも通りの射撃をすることも難しく、練習のようにリズムよく高得点を取ることができず、得点も低調に終わりがっかりしていました。諦めかけていた団体戦も、厳しい環境下での試合に苦戦する選手が続出し、最終は第2位になり、個人も8位になんとか滑り込みファイナル進出を果たしました。マイナス思考になりかけていた私に、監督や周りの部員は「これ以上順位は下がるんから、開き直って思い切り攻めろ！」という声があり、個人戦に向けて前向きな気持ちに切り替わりました。心の整理をつけて臨んだファイナルのファーストシリーズが始まり、最初の10発が終わった時点で5位。その後もいいリズムで撃つことができ3位まで順位を上げることができました。そのことを確認した次の射撃で、痛恨のミスショットをしてしまい結果は第5位で全てが終わりました。その瞬間、小松島高校での3年間、最後の大会で目指していた結果を残せなかったこと、先輩と1年前に交わした約束を守れなかったことなどの思いが駆け巡り、あと一步届かなかったことを悔しく感じ涙があふれてしまいました。私にとっては2年連続で団体2位、個人5位入賞という結果はすぐには受け止められない内容でしたが、そのことを先輩に報告するととても温かい言葉が返ってきて少し気持ちが楽になりやっとな顔を上げることができました。

今大会で私は、この競技の難しさを改めて強く感じました。2年間追い続けてきた団体・個人の優勝というタイトルは有望な後輩達に期待し、残りの高校生活で何か恩返しができるかと考えています。いろいろな人達に支えられてやり遂げることができたことに感謝して、新たな目標めざし頑張ります。ありがとうございました。

全国選手権大会で団体優勝して

阿南光高等学校 今田 碧 月



7月末に開催された全国高校ライフル射撃競技選手権大会に徳島県代表として女子チームライフル団体に出場しました。ライフル射撃の団体戦は3人の選手がそれぞれ40発ずつ撃って、その合計点で順位を決めます。3人のうち私の他は3年生でこの大会が競技生活の集大成となります。3年生の乾選手と長坂選手はこれまでに開催されたいくつもの全国大会で毎回優勝含め上位入賞している実績のある選手です。その先輩たちに少しでも追いつかなくて誰よりも練習してきたつもりです。そして、県総体や四国大会では団体戦の得点が全国優勝できるだけの成績を残せる状態になっていきました。

大会が開催される7月は暑さとの戦いでもあります。専用のコートを着て行うので、着ているだけで汗が止まりません。熱中症にならないように、体調管理をするのも競技成績を残すためには必要です。多くの射撃場では冷房完備ではありません。練習から暑さに慣れるように、自分の試合時間の気温を想定して練習に取り組みできました。

出場校は全国各地の予選を勝ち抜いてきた30校です。私にとって初めての全国大会で、前日に行った練習の時から緊張して思うように射撃ができません。心を落ち着かせながら自分の射撃だけに集中することを心がけました。私は3番目に撃つので、先に先輩たちは競技を終えています。試合が始まると心臓の鼓動がいつもよりも強く感じ、体も揺れてなかなか自分の射撃ができません。それでも、一発一発に集中しながら40発撃ち終わりました。私自身の目標としていた点数を出すことはできませんでしたが、3人の合計点は参加校の中で最も高く、優勝することができました。初優勝と言われて、うれしかったのですが、あまり実感がわかず、ただただびっくりしていました。先輩たちの最後の大会で優勝に貢献できてとてもよかったです。試合後のインタビューで先輩から「今田さんがいたから優勝できた」と言ってくれたときにはとてもうれしかったです。二人の先輩は個人戦でも優勝と8位に入賞し、来年はこの大会で個人でも成績を残せるように頑張ろうと決意を新たにしました。大会で好成績を残すことができたのも顧問の先生や徳島市ライフル射撃場の方々のおかげです。多くの方に感謝すると同時に、今後も頑張っていきたいです。

全国選手権大会を振り返って

小松島高等学校 ライフル射撃部 尾崎 颯 汰



7月下旬に、広島県で開催された全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会に、小松島高等学校からは男子6名、女子1名の7名が団体戦と個人戦に出場しました。私は、県総体や四国総体の結果チームライフル競技で、団体戦と個人戦の両方に出場しました。3年生主体のチームで戦う最後の試合だったので、これまで取り組んできたことの集大成として頑張ろうと意気込んでいました。

6月の県総体や四国総体ではとても調子よかったものの、その後西日本大会や選手権直前に宮城で出場した全日本選手権では思うような射撃ができませんでした。調子の悪さから抜け出せず、焦りから初心に戻ることを忘れるほど動揺していました。しかし、先生方や他の部員からアドバイスをもらい、冷静に考えるようになり広島に行く前には復調していました。

夏の厳しい暑さの中、広島で最後の大会が開かれました。チームライフルで私は団体戦の第2射を務めました。第1射の山田君、第3射の戸田君との合計スコアで念願の全国優勝を目指しました。試合の時、いつも意識している「いつも通りの射撃」と先生や仲間の励ましを胸に試射にのぞみました。始まるといろんなことが気になり、「これが最後の試合」という思いが頭をよぎり、一気に緊張してしまいました。本射の60発では、自分をコントロールしていつもと同じくらいの成績で競技を終えることができました。他の2人もベストを尽くし、最終結果は2位で終わりました。1位との差は僅差で、3年連続団体2位という結果に悔しい気持ちもあり、複雑な心境でしたが精一杯やったという気持ちになりました。

私は、小松島高校に入学してなんとなく興味を持ったライフル射撃で、最後に全国大会の舞台に立てるとは想像もしていませんでした。ここまで取り組んでこられたのは、毎日最後までご指導をいただいた先生方や、最後まで共に戦い抜いた仲間、様々な事で支えてくれた家族のおかげがあったからです。たくさんの人への感謝を忘れずに、これからも新たな目標に挑戦していこうと思います。

皆で勝ちとった団体3位

城南高等学校 中 津 美桜乃



私たちは広島県で行われた全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会に、エアライフル女子団体の徳島県代表として出場しました。団体メンバーは3年生の鈴江、喜多、私と2年生の泰地です。

今年は昨年度の全国団体6位を超え、優勝を目標にチームで頑張ってきました。全国出場をかけた県総体や四国大会では、少し点数を落とすこともありましたが全員が、全力を出し切り優勝を果たしました。誰かの調子が悪くても互いにカバーして声を掛けあうことで、大会や練習を重ねる度にチームとして成長しているのを感じることができました。受験勉強や夏期補習の忙しい中でも4人で質の高い練習を積み重ね、射撃の精度を高めていき、メンタル面でも大会本番に照準をあわせ調整していきました。

大会は4日間あり、私たちは最終日です。早めに現地入りし、会場に慣れて満を持して当日を迎えました。ところが、私たち3年生にとっては最後の大会ということもあり、今までにない緊張とプレッシャーを感じ、点数を伸ばしきれませんでした。しかし、泰地の大会新記録となる見事な射撃がチームを支えてくれました。その結果、私たちは全国3位を勝ちとることができました。自分の射撃への悔しさはありますが、全員が精一杯を尽くすことができたと思っています。最後の全国大会、このチームで輝かしい成績を残して終わられて本当によかったです。

私たちは射撃を通して多くの人と繋がり、支えられ、多くのことを学んできました。木内先生には射撃の技術とメンタルについて、一人一人に深い指導をして頂きました。片山先生には技術やメンタル面のみならず、日々の練習メニューや遠征など、部活動をするにおいてあらゆる面から支えてもらいました。そして苦楽を共にし、数え切れない思い出をつくってくれた仲間たち、おしまわず協力してくれた家族には感謝しかありません。この経験は私たちの一生の財産です。

後輩たちには自分の射撃スタイルを見つけ、仲間との支え合いを大切に、私たちが達成できなかった全国優勝を果たしてほしいと思います。応援しています。

全国選手権大会 団体7位になって

小松島西高等学校勝浦校 工 藤 達 也



私は、2年生の時に男子エアライフル団体の補欠として全国選手権に帯同しました。そのときは補欠だったので、試合には出場できずサポートに徹しました。3年生2名に混じり、同じ2年

生の子が選手として出場し、団体6位入賞を目の当たりにして、うれしかったのと同時に、その場に立てなかった悔しさもありました。そのときに、自分も絶対に全国選手権大会に出場するという決意をしました。

昨年度の全国選手権以降、朝練にも積極的に参加し、放課後の練習や徳島市ライフル射撃場でのエアライフルの練習に打ち込み、なかなか上がらなかった点数が徐々に伸びていき、射撃が楽しくなりました。

3年生になり迎えた最後の県総体では、個人でも団体でも全国選手権大会出場を目標に掲げ、試合に臨みました。総体では自分の射撃を心がけ、エアライフル個人で4位入賞、団体でも優勝し目標を達成することができました。次は全国選手権大会で個人でも入賞し、団体では昨年度の6位入賞以上を目標に練習に励みました。

全国選手権では、緊張から自分の射撃ができずに終わってしまい、チームの足を引っ張ってしまった悔しさもありましたが、団体で7位に入賞できてうれしかったです。悔しさとうれしさが入り混じった複雑な気持ちでしたが、それも含めて楽しかったです。

私はライフル射撃部に入って、日頃の行いや考え方、地道な努力の積み重ねが成長につながるということが分かりました。これまで私を支えてくれた方や両親、木内先生や坂野先生には感謝しかありません。ライフル射撃に出会えて本当によかったと思います。

多くのことを学んだ夏

富岡東高等学校
弓道部 祖父江 結子



スポーツをする高校生にとって、インターハイは夢の舞台である。私の高校在学中にその夢の舞台が地元に来るという偶然は、ラッキーとしか言いようがない。その大会に補助員という形で携われることになり、私はとても興奮した。

試合前々日、会場となる「とくぎんトモニアリーナ」に、県内の弓道部から集まった補助員の数は、私の想像を超えていた。試合前日は選手たちの練習日で、私たちは試合と同じく矢取りの係を行った。与えられた係の仕事をしながら、明日からの本番では、失敗しないようにと自分に言い聞かせたことが印象に残っている。私は父が運営委員として同じ会場にいたので、インターハイに関わった8日間、父と6時前に家を出て、毎朝会場外の花に、水をやるどころから1日の係の仕事 시작했다。皆それぞれに係を受け持っており、忙しそうなので、自分にも手伝えることがあればと思い取り組んだ。インターハイなど全国規模の大会会場ともなると、常にきれいに美化されているイメージがあった。今まで気付かなかったけれど、自分が水やりをしている約15分の時間は、多くの人の協力があって大会が成り立っているのだということに改めて実感させてくれた。また、開会式と閉会式で式典補助係として貴重な役割をさせていただき、私は、体全体で背筋が伸びるような式典の空気感を味わえたことに心から感動した。

補助員として、全国のトップレベルの選手の技術や精神力の高さを、身を持って感じる事ができ、私にとって良い刺激になった。特に、自分と同じ流派の選手の体配を間近で見ることで、日々の練習に取り組む姿勢や継続することの大切さに気付くことができた。来年の北海道インターハイでは、感謝の気持ちを持ち、選手として出場できるように精進していきたい。

今回、たった3年しかない高校時代に、地元開催のインターハイに携われたことは、私の人生にとってかけがえのない財産になったと確信している。このような機会を与えてくださった関係者の皆さんに感謝したい。ありがとうございました。

ホッケーからの贈り物

阿南光高等学校 湯 浅 寧々



私は今回、初めて放送部員としてホッケーのインターハイに関わらせていただきました。ホッケーの会場が阿南光高校のホッケー場だということもあり安心していましたが、初日はホッケーのルールなど何も分からず、私が

選手たちの役に立てるかと不安になったりもしました。しかし、3日間を通して様々な県から勝ち上がってきた選手たちの「ありがとうございました。」と言う些細な感謝の言葉に、また勝ち上がる選手たちの喜びの声、負けてしまった選手たちの涙、選手たちを応援する親御さんの声に、多くの人々に参加してよい経験ができたと思感させられました。

インターハイには多くの感動がありました。出場できた選手の皆さん全員がインターハイに出場するために、私にはとても計り知れないくらい多くの悩みや困難を乗り越え、努力し臨んだ大会なんだと感じました。勝ち負け関係なく出場校全員の青春を見た気がします。その「青春」は、チームメイトや監督さん、相手チームとの関わりで成り立っていると感じました。決勝に近づくとつれ、自分も不思議と緊張していました。それだけホッケーの試合に夢中になっていたんだと思います。最終日には、もうルールをすべて完璧に把握でき自分も楽しんでいました。3日間こんなにもホッケーのことをルールも覚えらるぐらい夢中になれるんだと、自分自身も驚きました。残念ながら阿南光高校の試合は見ることはできませんでしたが、毎日悩みを抱えながらも真剣に努力を積み重ねている姿を見ているからこそ、今ある実力を全て出しきってくれると確信していました。何より私は全員が仲の良いチームだということ、どんな試合であっても諦めないことが阿南光高校の強みだと感じています。私も文化部にはなりませんが、何でも相談できる頼もしいチームメイトがたくさんいます。そのチームメイトがいてくれることは当たり前ではなく感謝すべきことだということもインターハイの選手の皆さんを見て考えることができました。お互いがお互いを高め合ってほしいと思うと同時に、私も今ある高校生活を堪能しつつ色々なことにチャレンジし、努力していこうと思います。

ホッケーとの出会い

阿南光高等学校 大平 奈菜実



私は小さい頃からスポーツをするのも見るのも大好きでした。この阿南光高校に入学すると、インターハイのホッケー競技の会場になっていることを知り、とても楽しみにしていました。そして今年、ボランティアを募集して

いたので、絶対に参加したくてすぐに応募しました。先生から放送係のお誘いをいただいた時、放送席が審判の後ろだと聞き、間近で見られるのではと思い、引き受けさせていただきました。

インターハイ当日、放送係の仕事は、試合前に会場へのアナウンスから始まります。そして、チームの選手や監督、ユニフォーム、その試合のアンパイアの紹介を行います。一番緊張したのがこの選手紹介でした。名前や背番号を間違えてしまわないよう、オーダー表が着き次第、何度も練習しました。試合中は、クォーターの開始や終了、反則、得点、選手交代のアナウンスを行います。どの試合もとても白熱していて思わず夢中になってしまっていました。すると、気づいたら交代で入る選手が出てきていたり、得点が入るシーンでは目を凝らして見ていたはずなのにどの選手が入れた得点なのかが分からなかったりと、試合が動く場面ではいつもバタバタしていました。試合後には試合結果や会場からの退場のアナウンスを行いました。勝っても負けてもきちんと観客席へお礼をいっている姿は込み上げるものがありました。

私は友人と共に2日目の7月31日から決勝戦が行われた8月3日までの4日間参加させていただきました。その4日間でたくさんの試合を見ることができました。ルールを何一つ知らないままの参加でしたが、見れば見るほど分かるようにもなりましたし、間近でも見れたということもあり、とても楽しかったです。どの選手も皆さん一生懸命で、当たり前ですが素人から見てもとても上手でした。マイクの係じゃない時はPCや得点が入った時の音楽も担当していたので、審判のシグナルも少しなら分かるようになりました。

今回のインターハイにボランティアで参加させていただいて、本当に貴重な経験をすることができました。

大好きな競技が一つ増えました

インターハイを通して

城東高等学校 藤井 健人



私はボランティアに参加して、特に「感謝の大切さ」を改めて学ぶことができました。インターハイ全国大会という非常に大きな舞台でボランティア活動に取り組めたことをとても嬉しく思います。

今回初めてスポーツを「する立場」から、それを「支える立場」の経験をすることができました。私は、会場設営やボールボーイの仕事をお手伝いさせていただきました。また、こういった役割だけではなく、記録や放送、看護など様々な方面からのサポートがある事によってスポーツ選手を支えていることを知りました。私は今まで支える側について深く考えたことはありませんでした。しかし、実際にボランティアを行うことで支えてくれている方々のありがたさを感じました。

様々な試合を見て私は、予選を勝ち進んできた各都道府県の代表高校の選手たちの底力、逞しさに驚きました。またプレー以外の面でも、人に対する立ち居振る舞いや非常に大きな声援に圧倒されました。この舞台上がるために選手一人一人がどれだけ努力し、頑張ってきたのか、私が想像する以上のものを感じました。特に、聖和学園高校と立正大湘南高校の試合が最も印象に残っています。それぞれのプレースタイルがぶつかり合うことが面白かったのですが、それと同時に点を取られても負けじと点を取り返す諦めない心にも感動しました。

今までボランティアの意義について漠然としか分かっていませんでしたが、ボランティアを通して、スポーツボランティアは選手を支えると共に自分が生きていく上で必要な事を学ぶことができると知りました。普段関わりのない人と関わり、意思疎通を取ることでコミュニケーション能力を培うことができました。また会場設営時の際に人数不足が起こったため、私は色々な人を集め、仕事を行いました。このことはリーダーシップの向上にも繋がると思います。

今回はコロナ禍にも関わらず貴重な体験をすることができたと思います。「感謝の大切さ」を学ぶとともに、複数の高校がボランティアに参加することによって、サッカーを通じた新しい繋がりが生まれ、地域にスポーツの文化を根付かせ、ひいては徳島の活性化につながるのではないかという思いを強くしました。